

コロナで排出減でも…

大気中の二酸化炭素濃度、過去最高に 気候危機待ったなし

世界気象機関（WMO）は5日、先月の世界の平均気温が、5月として過去最高を記録したと発表した。1981～2010年の5月の平均気温に比べ、**0.63度高かった**。特に**シベリアで10度**も高くなったほか、米国のアラスカ州や南極でも上昇が顕著となっている。また**5月の大気中の二酸化炭素（二酸化炭素）濃度が過去最高の417.1ppm**を記録したと発表した。

新型コロナウイルスのパンデミック（世界的な大流行）による経済活動停止で、一時的に排出は下がっているが、経験のない地球温暖化の危機が続いていることが改めて示された。

世界の指標の一つとなっている米海洋大気局（NOAA）のハワイのマウナロア観測所の5月のデータで、昨年より**2.4ppm**増加した。大気中の二酸化炭素は季節変動があり、植物が成長する夏には吸収されて減るため、北半球の夏前にピークを迎える。マウナロアの研究者は濃度が上昇していることについて「**（コロナ）危機は排出を遅らせたが、マウナロアで感知できるほど十分ではない**」としている。

大気中の二酸化炭素濃度は産業革命前は約280ppmだったが、**2014年にマウナロアで初めて400ppmを突破**。毎年2ppmほどの増加が続いている。国連の気候変動に関する政府間パネル（IPCC）は、気温上昇を2度未満に抑えるには、450ppm程度に抑える必要があるとしている。

新型コロナウイルスのパンデミックの影響で、世界経済が停滞したため温室効果ガスの排出が大幅に減る見通しだ。しかし、コロナ危機が終わって、反動が出るおそれがある。これからも続く気候危機に対処するためには、各国の経済対策がカギになる。

主要新聞より転写



「環境産業」の育成を目指す北海道室蘭市。製鉄所の近くで風力発電の風車が回る